

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 15 日現在

機関番号：32638

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520325

研究課題名(和文) 20世紀アメリカ演劇が描く資本主義世界の諸相

研究課題名(英文) Various Aspects of Capitalism in the 20th-century American Drama

研究代表者

大森 裕二 (OMORI, Yuji)

拓殖大学・工学部・准教授

研究者番号：40384698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：若い頃からマルクスの思想に傾倒したユージーン・オニール (Eugene O'Neill) の演劇作品に通底するのは、貪欲な資本主義文明世界に対する警鐘であり、オニールを筆頭とする20世紀アメリカの主要劇作家たちは、資本主義世界を巡る極めて今日的な問題群と格闘してきた。本研究ではマルクス思想や人類学などの知見に照らしつつ、そのことを明らかにすることを目的とした。

研究成果の概要(英文)：Eugene O'Neill had great interest in Marxism since his youth, and criticized the greedy capitalist society in many of his major plays. Other major twentieth-century American playwrights have tackled with the issues regarding the capitalist world as well. In this research project, I aimed to describe how they criticized the system while learning about alternative systems from Marxism, anthropology, and other fields.

研究分野：人文学

キーワード：アメリカ演劇 Eugene O'Neill Tennessee Williams Sam Shepard Dionysus

## 1. 研究開始当初の背景

若い頃からマルクスの思想に傾倒したユージーン・オニール (Eugene O'Neill) の演劇作品に通底するのは、貪欲な資本主義文明世界に対する警鐘であり、その主要劇作品群で描かれる人物たちの労働、貯蓄、消費と言った経済的活動に注目すると、幾つかの興味深い類型的な人物群像が浮かび上がる。中期の代表作の一つ『榆の木陰の欲望』(Desire under the Elms) に登場するエフライム・キャボットは、いわゆるピューリタンの資本主義の原型的精神を体現する敬虔・勤勉・強欲な人物である。その精神を世俗化した形で継承したのが、その他数多くの作品群に登場する「実業家」型人物であり、物欲に目の眩んだ彼らの盲目性が作者による手厳しい批判の対象となっていることは、既に先行研究で繰り返し指摘されているところである。一方、「実業家」型人物とは対照的に、勤勉や貯蓄、儉約の精神を鼻で笑って蕩尽に明け暮れる「放蕩者」型人物も少なからず登場する。しかし、こうした人物については、その原型を作者オニールの実兄に求める伝記的研究はあるものの、体系的な議論はまだなされていない。「放蕩者」型人物の多くに共通するのは、その悪党的仮面の下に、心やさしく気前のよい素顔が見え隠れすることである。彼らの気前のよさは、資本主義発達以前の贈与社会において人間共同体を結束し維持する要であった「贈与の精神」を髣髴させるものであり、それ故に、彼らは箸にも棒にもかからぬやくざな存在であるにもかかわらず、売買の市場原理で動く資

本主義世界に対する奇妙な批判者たり得ているのである。筆者は、既にこのことを演劇誌『テアトロ』(2010年11月号・12月号)に寄せた連載エッセイでオニールの後期二作品に登場する妻殺しセオドア・ヒックマン(ヒッキー)と賭博師エリー・スミスについて論じる形で凝縮的に示した。本研究では、それをさらに深化・発展させ、オニール主要作品における「放蕩者」型人物の系譜を体系的に論述することを皮切りに、オニールとその周辺のアメリカ主要劇作家の作品で描かれる資本主義世界の諸相を、マルクス思想、マルセル・モース (Marcel Mauss) の贈与論、クロード・レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss) の構造人類学、ジョルジュ・バタイユ (Georges Bataille) の普遍経済学などの知見に学びながら、批判的に分析考察したいと考えた。これが本研究開始当初の背景である。

## 2. 研究の目的

オニール後期の傑作『氷屋来たる』(The Iceman Cometh) では、摩天楼聳えるニューヨークは、ヨハネ黙示録に言及される滅びゆく「淫売の母」バビロン、ミハエル・エンデ (Michael Ende) 曰く「本来売買してはならないものが売買されている」(『エンデの遺言』35頁)悪徳の都に譬えられる。一方、『ヒューイ』(Hughie)では、格差社会の底辺に生きるチャールズ・ヒューズがニューヨークを燃やし尽くす大火事の発生を夢想する。こうした黙示録的幻想は、摩天楼が象徴する貪欲

な資本主義文明世界の死と再生を遠望する作者オニールの声明である、とひとまずは言える。しかし、いわゆる<9.11>以降の世界において誤解を招くことなくそのことを発信するには、より緻密な学問的論証が必要である。売買の市場原理が支配する資本主義が世界を覆い尽くし、その影響力は人間社会のあらゆる領域に亘り、我が国でも人間的絆の希薄な無縁社会の蔓延が深刻化するなどの様々な問題が発生している現在、マルクス思想や、人類学が解明してきた近代以前の人間社会のあり方に学ぶべきことは多い。本研究は、オニールを筆頭とするアメリカの主要劇作家たちが、資本主義世界を巡る極めて今日的な問題群と格闘したことを明らかにし、その劇作品群に新たな光を当てることを目的とした。

### 3. 研究の方法

- (1) マルクス思想、Emma Goldman 関連の無政府主義思想、モースの贈与論、レヴィ=ストロースの構造人類学、バタイユの普遍経済学など、資本主義世界システムを批判的に把握するための文献の収集・調査を進める。特に現在も資本主義に対する最も透徹した批判体系とされるマルクスの思想については、その真髓を把握するために多くの文献に当たる。また、*Marx in Soho*, *Emma* 等の劇作品でも知られるアメリカの歴史家ハワード・ジン (Howard Zinn) の関連文献についても史実把握のために通読を進める。
- (2) (1)の作業で得た知見に照らしつつ、オニールの主要作品に登場する「放蕩者」型人物

の系譜を調査する。この際、オニールの社会思想遍歴や作品執筆過程についての詳細情報を活用するため、米国の大学図書館等が所蔵する資料の現地調査も行なう。

- (3) 上記二種類の作業と並行して、テネシー・ウィリアムズ (Tennessee Williams)、アーサー・ミラー (Arthur Miller)、サム・シェパード (Sam Shepard)、オーガスト・ウィルソン (August Wilson)、デイヴィッド・リンゼイ=アバアー (David Lindsay-Abaire) など、他のアメリカ劇作家作品についても、資本主義機構の砦としての都市とその対極にある自然との関係性、都市に住む人間のあり方など、そこに描かれる人間群像と世界像に焦点を当てて検証を進め、アメリカ演劇が描く資本主義世界の諸相の通時的理解に努める。また 20 世紀アメリカの小説や詩など、他ジャンルの作品も必要に応じて通読調査を進める。

### 4. 研究成果

ジョルジュ・バタイユによれば、いわゆる「未開社会」の経済活動の要となっていたのは、生産ではなく消費であった。獲得した富をいたずらに貯えるのは恥ずべき吝嗇であり、共同体のリーダーには気前の良さが求められ、貯えた富は公共的に盛大に消費された。対照的に、資本主義産業システムの発達した現代社会では、儲けた利益は更なる生産のために蓄積され、およそかつての祝祭の精神からは程遠い、真面目、勤勉、儉約を是とする「実業家」型人間像が支配的となった。オニール

作品における「放蕩者」型人物は、かつての祝祭人間の末裔である（その典型は、『氷屋来たる』のお祭り男ヒッキーである）。この着想を念頭に置きつつ、以下の通り、論文執筆や学会発表を行なった。

(1) オニール演劇に登場する「放蕩者」型人物を考察する上で外せないのが、初期の芸術家劇『パンとバター』(*Bread and Butter*)と『朝食前』(*Before Breakfast*)である。両作品で描かれる芸術家志望の青年は、芸術で生計を立てることができないことに失望し、酒に溺れ、両者ともに破滅に至る。本研究期間中は、これら二作のうち、『朝食前』についての論文を公表した。その要旨は、およそ以下の通りである。主人公の芸術家志望の青年アルフレッドが芸術の道を志したのは、金銭づくの巨大資本家だった父親に対する反抗心が作用していたに違いない。しかし、父親の他界によって金銭的援助が断たれた今、息子夫婦の生活は立ち行かなくなっている。芸術家アルフレッドの実体は、資本主義社会に対する勇敢な反逆者というよりは、むしろ資本家たる父親に寄生してきたパラサイトであり、本作品はタニマチを失ったボヘミアン芸術家の無力な姿を描くことで、芸術至上主義者が直面する現実をアイロニックに描いてみせる。本作品の最大の面白さは、あくまでも内なる生命力に従って自由に生きようとする芸術家が死と破滅に至るパラドックスを簡潔に表現してみせたところにある。既にニーチェに心酔していたオニールは、このボヘミアン芸術家をめぐるパラドックスをディオニュソス的

な主題として意識していたに違いない。『朝食前』は、ディオニュソスをめぐる作者の思索の萌芽的な作品として意義深い。

オニール演劇における「放蕩(者)」のモチーフがいわゆる「ディオニュソス」の問題と絡み合っていることを確認できたことが、本論文の主たる収穫だった。

(2) オニール中期の仮面劇『偉大なる神ブラウン』(*The Great God Brown*)についての学会発表を行なった。初期芸術家劇同様、本作品にも放蕩に耽って破滅に至る芸術家ダイオン・アントニーが登場する。ディオニュソスに由来する名前を持つダイオンは、本来は、生をこよなく愛する生命力に溢れた祝祭人間であるが、問題となるのは、同時にキリスト教徒でもあるダイオンが生を否定する被虐的精神をも持ち合わせていることである。禁欲的キリスト教徒としてのダイオンが、祝祭的なもう一人のダイオンを絶えず否定するために、「当初のディオニュソス的な一つの人格が、聖人と悪魔という二つの正反対の人格へと分裂」(Brugnoli)する。本発表では、「芸術家の放蕩」のモチーフがディオニュソス的・祝祭的な生を十全に生きることができない文化状況を反映したものであり、本作品の思想的バックボーンとしてニーチェの哲学があることを論じた。

(3) オニール中期の長編劇『奇妙な幕間狂言』(*Strange Interlude*)を扱う学会発表を行なった。本作品には「放蕩」の主題はほぼ見受けられないが、放蕩者と好一对を為す実業家型人物サム・エヴァンスが登場している。サ

ムが代表する資本主義物質文明の、特に父権主義的・非生命的な側面について、母になることを目指すヒロイン・ニーナの自己実現と絡めて論じた。また、『偉大なる神ブラウン』同様、本作品にも西洋プラトニズムの伝統を批判したニーチェ思想が背後にあることを指摘した。

(4) 研究期間開始直前に東日本大震災及び福島原発事故が起こったため、資本主義世界を支える「炉」としての原発や、核の問題に関する文献にも少なからず当たった。テネシー・ウィリアムズの『二人芝居』を扱った論文には、その影響が表れている。要旨は以下の通りである ウィリアムズの『二人芝居』は、自らの芸術の完成に専心するあまり狂乱状態にある舞台芸術家フェリースによる、混沌たる創作過程そのものを舞台化したアウトサイダー・アートの作品である。しかし、その混沌とした舞台は同時に、一触即発の最終核戦争の脅威に世界が最も怯えていた冷戦時代を反映したものである。極寒の地の窓一つない地下シェルターのような劇場が舞台となっているのは、生命根絶の核の脅威に怯える現代世界を冬の時代、死の時代と作者が考えているからである。その劇場でフェリースが妹のクリアとともに演じようとするのは、真冬とは正反対の、真夏の太陽の季節を舞台とする劇中劇である。当然、そこには現代という混迷の冬の時代を乗り越えるためのメッセージが込められているはずであり、その内容は、煎じ詰めれば、劇中劇の中心的モチーフとなる向日葵が象徴する、根源的生命礼賛

主義（広義の biocentrism）に収斂されるだろう。

(5) 本研究期間中には、この他にオニールの『夜への長い旅路』(Long Day's Journey into Night)に関する英文論文を完成することができた。まもなく米国で出版される予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

(1) 大森裕二著「内なる野生のパラドックス：オニールの『朝食前』」「人文・自然・人間科学研究」(30) 96-91, 2013年10月, 査読有

(2) 大森裕二著「真昼に咲く向日葵の夢：テネシー・ウィリアムズ『二人芝居』」「人文・自然・人間科学研究」(29) 72-55, 2013年3月, 査読有

[学会発表](計4件)

(1) 大森裕二「空と大地の詩学：オニールの『奇妙な幕間狂言』」日本アメリカ文学会東京支部 2014年3月22日

(2) 大森裕二「オニール演劇と放蕩」日本アメリカ演劇学会第3回大会 2013年9月29日

(3) 大森裕二「『朝食前』：作品の周辺事情と批評」アメリカ演劇上演研究会 2013年1月29日

(4) 大森裕二「David Lindsay-Abair, *Rabbit Hole* を読む」現代演劇研究会 2013年1月12日

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大森 裕二 (Yuji Omori)

拓殖大学・工学部・准教授

研究者番号：40384698

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：